



令和4年度研究助成 【音楽振興部門】より

融化ネウマのサウンドとしての特性を探る

エリザベト音楽大学音楽学部
准教授

佐々木 悠

1. はじめに

現在のグレゴリオ聖歌研究は、①グレゴリオ聖歌パレオグラフィ *Gregorian chant palaeography* と、②グレゴリオ聖歌セミオロジー *Gregorian chant semiology* の二領域からなる。前者は、19世紀初頭の音高非明示ネウマによる写本発見（図1）を契機とし、記譜法の解明を主たる目的としている。後者は、前者の成果をもとに、具体的な音響現象を考察するものであり、1970年前後にまで遡る。なお20世紀中頃まで、リズム理論としてのソレム・メソッド（アルシス、テーシス、キロノミーなど）が存在したが、セミオロジーの台頭により、現在ではその理論そのものが否定されている。

パレオグラフィの中心は、各地で作成された写本蒐集とその整理、そしてその記譜法の比較である。これまでの研究により、音高非明示ネウマの種類やその音楽的情報の意味が明らかにされ、9世紀後半にまで旋律の原型を辿ることが可能になった。また音楽理論と

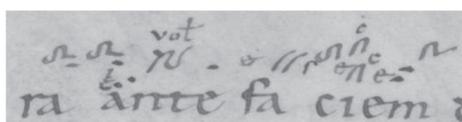


図1 ネウマ譜とネウマ (*Einsiedeln*, 26)

しての旋法研究も進み、旋律本来の音高や旋法が復元されるに至った。それらの結果は、ミサ固有唱を含む新聖歌集『グラドゥアーレ・ノーヴム』 (*GrN*, 2011 & 2018) に反映されている。

しかし、このような旋律復元のみでは、聖歌がどのように鳴り響くべきかを想像すること自体に困難を極めたのは言うまでもない。そこで提唱されたのが、研究領域としてのセミオロジーであった。これは、ネウマを実際に鳴り響いたサウンドの記録と仮定し、ネウマを再解釈するものであり、既に50年以上の歴史を持っている。

2. 筆者によるこれまでの研究と本研究の概要

冒頭のタイトルに示した「サウンドとしての特性」からも明らかなように、本研究は先述のセミオロジーに属する課題である。融化ネウマ *liquescent neume*（図2）は、9世紀の音高非明示ネウマによる写本（*Laon, Eindiedeln* など）に既に確認されており、発音的な問題や音楽的な表現を反映したものであると考えられてきた。11世紀頃に書かれたとされる『ミクロログス *Micrologus*』にも、



図2 融化ネウマ
普通のネウマとサイズや形状が異なる

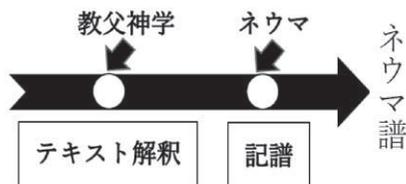


図3 ネウマ譜作成プロセス仮説

融化に関する記述が見られることは知られている。しかし融化ネウマ本来の意図について、9世紀前後の資料にその根拠を見出すことはできない。それゆえ、現在に至るまで、様々な研究者たちが融化とそれを示すネウマの意味を多角的に考察してきた。そして1950年代から1980年代半ばにかけて、音声学的融化現象の条件が整理され、その音響を具体化したものが融化ネウマであることが共通理解となった (Cardine 1970 ; Agustoni and Göschl 1992)。またそのリズムには、拡大融化 *augmentative liquescence* (ネウマ) と縮小融化 *diminutive liquescence* (ネウマ) の存在が指摘されている (Agustoni 1963)。さらに近年では、その修辞学的要素が聖歌理解の重要な鍵になると考えられるようになり、記譜家のテキスト解釈時に、写本群成立時に主流であった教父神学の影響を受け、それがネウマ譜に何らかの形で音楽的に現れているのではないかという見方がされている。しかし、音楽のどの部分にそのような解釈が反映されているかについて確立した見解は見られない。

そこで、筆者はミサ固有唱の中から入祭唱を中心に、融化ネウマのリズムの特徴を考察してきた。特に、その修辞学的要素が中世初期の神学に多大な影響を与えたアウグスティヌスの聖書解釈と関係性を持ち得ると仮定し、分析してきた。その一部は、一般財団法人カワイサウン

ド技術・音楽振興財団・平成31年度研究助成の対象となった。また、融化ネウマを含むネウマ群による音楽的な強調と、アウグスティヌスの聖書解釈との結びつきについても、継続的に解釈を試みている (佐々木 2021 ; Sasaki 2020, 2022)。

これまでに、融化ネウマを含むネウマによる音楽的な強調には、記譜家によるアウグスティヌスの聖書解釈を基にしたテキスト解釈が関係している可能性を指摘することができた。そして「ネウマ譜作成プロセス仮説」(図3)を立て、約600曲の固有唱全曲分析への足掛かりを得たところである。

分析対象と研究内容

今回の研究では、この作業仮説を実証する一つの試みとして、融化ネウマの実際的な音響がどのようなものであり、それがどのような特性(リズム、音質、音色)を備えているかを考察する。

分析対象はこれまでの研究において検討した中から、8曲 - *In. Ad te levavi*, *In. Dominus dixit ad me*, *Of. Laetentur caeli*, *Comm. In splendoribus*, *In. Viri Galilaei*, *In. Requiem aeternam*, *Tr. De profundis*, *In. Miserere mihi Domine* - を中心に考察を進めている。

具体的な研究内容としては、以下のとおりである。第一に、先述の曲について、融化ネウマ

のサウンドを考察する。その際に、ロマンス語とドイツ語の発音による違いも検討する。これは、音高非明示ネウマによる写本の成立時に、聖歌のラテン語がロマンス語の発音に基づいていたという説が有力なもの、写本成立地域の多くにはドイツ語圏も含まれており、ドイツ語に基づく発音によって融化されていたことも完全には否定し難いからである。そして第二に、主に次の観点から分析を行う。

- 融化ネウマの長さの変化によって生じるリズムの変化が、曲全体のリズムとどのような関係性を持つのか。
- ロマンス語とドイツ語の発音による違いが、融化ネウマの音楽的なリズムにどのような影響を与えるか。

3. 今後の展望

融化ネウマ自体の研究が始まり、既に2世紀近く経つものの、サウンドの特性を具体的に検討した例はほとんど見当たらない。したがって本研究により、融化ネウマの聴覚的な意味が具体的にになるとともに、その本質的意味の解明に繋がる糸口が見出されると想定される。また他のネウマ群のリズムとの関連性についても、具体的な仮説の提唱が可能になると考えられる。さらに本研究の結果は、音楽のリズム研究全体に限らず、グレゴリオ聖歌にリズムや拍子のル

ーツを見出そうとしてきた従来の音楽史・音楽理論研究にも、新たな視点をもたらすものと期待される。

謝辞

平成31年度に引き続き、助成対象としていただいたことに、心より感謝いたします。

参考文献

- 佐々木悠 2021『言葉を歌う』東京：教文館。
- Agustoni, L., and Göschl, J. B. 1987, 1992. *Einführung in die Interpretation des Gregorianischen Chorals*. 3 vols. Regensburg : G. Bosse.
- Cardine, E. 1970. *Sémiologie grégorienne*. Solesmes.
- Sasaki, Yu. 2020. Liquescence and Lyrics: The Influence of A. Augustinus in In. *Ad te levavi, Bollettino AISC Gre Japan*, 32 : 15 – 31.
- Sasaki, Yu. 2022. Augustinus' Influence on Liquescent Neume and Text Interpretation in the Introitus Miserere mihi Domine, *Elisabeth University of Music Research Bulletin*, 42 : 13 – 25.
- 聖歌集 (写本含)
- Einsiedeln. CH-E Cod 121, Kloster Einsiedeln Bibliothek. (<http://www.e-codices.unifr>.)

ch/fr/sbe/0121, 2022年10月14日確認)

Graduale Novum. Regensburg : Con Brio
2011, 2018.